# 平成30年度　玄海みらい学園　学校評価結果

資料２

| 1　学校教育目標 | 2　本年度の重点目標 |
|---|---|
| みらいへの挑戦<br>～Go　together～ | ①義務教育学校の特性を活かし、全職員がつながりを意識し、目指す方向性を理解した学校づくりの推進<br>②生徒理解に基づいた生徒指導の推進と自主・自立の気概のある児童生徒の育成の推進<br>③あいさつと歌声が響く学校づくりの推進 |

達成度　A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

## 3　目標・評価

### ①義務教育学校の特性を活かし、全職員がつながりを意識し、目指す方向性を理解した学校づくりの推進

| 領域 | 評価項目 | 評価の観点<br>（具体的評価項目） | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題<br>（左記の理由） | 具体的な改善策・向上策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学校運営 | ○学校経営基本方針 | 学園教育目標の周知 | ・児童生徒、保護者、地域への教育目標の周知を図り、認知度を80％以上にする。 | ・学校だより、学校ホームページ、連絡メールに常に掲載すると共に、校内の要所に掲示する。<br>・具体的な行動について、児童生徒が実践できるよう、各種集会で働きかける。 | A | 児童生徒は80％、保護者は90％を超えることができた。教職員から児童生徒への働きかけについては改善の余地がある。 | ・次年度も学校だより、ホームページ、連絡メールなどへの掲載と校内への掲示を継続する。<br>・学校教育目標の具体的な行動になるように各学級で学級目標を設定する。 |
| 教育活動 | ●学力の向上 | 基礎・基本の定着 | ・12月調査において、県平均に対する値を4月調査より3ポイント上回る。<br>・学校独自で作成した「家庭学習の手引き」も活用しながら、家庭学習の習慣化と自主学習ノートを使った学習内容の充実を図る。 | ・TTを効果的に活用し、個別の支援を充実させることにより、基本の定着を図る。<br>・児童生徒・保護者に家庭学習の手引きを配布して家庭学習の習慣化を図ると共に、自主学習ノート等のよい事例を紹介し学習の取り組み方を指導する。 | B | ・12月調査では、教科によって課題はあるものの、全体的に成績は上がってきた。<br>・家庭学習の手引きを児童・生徒、保護者に提示し、家庭学習の習慣化を図ったが、徹底するまでには至っていない。 | ・TTに加えて、少人数指導を取り入れ、基礎基本の徹底を図るとともに発展的な学習にも取り組ませたい。<br>・家庭学習の手引きをもとに引き続き習慣化を図りながら、内容の充実も目指したい。 |
| 教育活動 | ○海洋教育の推進 | 主体的に学び、積極的に発信できる児童生徒の育成 | ・海に関する学習を通して、ふるさとのよさや現状を見つめたり未来について考えたりしながら学びを深め、学習したことや考えたことを多くの人に発信する力を育成する。 | ・各教科、領域の系統的・横断的なカリキュラムを作成し、児童生徒の実態に応じた授業実践に取り組む。<br>・学習したことや考えたことを発表したり、伝え合ったりするのに、同学年間にとどまらず、他学年や保護者、地域住民、県や国内外の人々への情報発信の場を設ける。 | B | ・目標達成を実感している児童生徒が64%，保護者が91%と昨年度と比較して伸びが見られた。東京都や大牟田市で行われた海洋教育サミットで5～8年生の児童生徒が学びの成果を発信することができた。<br>・各学年の学習内容の系統立てができつつあるが，その見直しも絶えず行っていく必要がある。 | ・次年度も今年度までの2年間の学習内容の蓄積を生かす形で，各学年の学びを深めていきたい。<br>・学習内容を後輩や多くの方々へ向けて発信する活動を充実させ，さらに発信力・表現力を伸ばしたい。 |

### ②生徒理解に基づいた生徒指導の推進と自主・自立の気概のある児童生徒の育成の推進

| 領域 | 評価項目 | 評価の観点<br>（具体的評価項目） | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題<br>（左記の理由） | 具体的な改善策・向上策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 教育活動 | ●いじめの問題への対応 | いじめのない協力的な人間関係づくり | ・義務教育学校の特性を生かした、いじめのない協力的な人間関係を構築する。<br>・人権集会等の時間を計画的に設定し、差別を自らの問題として考えることができる人権学習づくりと実践に努める。 | ・学校行事を通して協力体制をもたせ、よりよい仲間づくりの構築を図る。<br>・教育相談週間等を設けて、積極的に児童生徒理解を行い、個別の支援を行うと共に、児童生徒理解協議会を開催し、心にとめおく子に対する支援体制の共通理解を図る。<br>・グループワークトレーニングや学び合いの授業づくりを通して、互いの理解を深めながら、「わかる」「できる」喜びを味わわせる。 | A | ・前期課程・後期課程共に人権集会や道徳の学習などで計画的の取り組むことができた。<br>・学習の場面だけではなく、義務教育学校の特性を活かし、全ての学校生活において実践することができた。 | ・学校行事や縦割り活動、縦割り掃除の活動を通して、更に仲間づくりを構築していきたい。<br>・人権集会は、学年グループで計画通り実施することができており、次年度も計画を立て、実施していきたい。 |
| 教育活動 | ●心の教育 | 望ましい集団作り | ・異学年との交流を適して、協力して実践的な態度や思いやりの心を育てる。 | ・1～9年生の縦割り活動を学校生活や学校行事に取り入れる。<br>・高学年が低学年をサポートする体制をつくり、高学年は低学年を慈しみ、低学年は高学年に憧れの念を抱く心を育てる。 | B | ・児童生徒は8割程度、保護者は9割程度が異学年との交流をできていると捉えている。望ましい集団づくを目指した縦割り活動について職員の意識向上を図りたい。 | ・次年度も縦割り活動を継続していく。児童・生徒は縦のつながりの意識ができ始めている。継続することが児童生徒とともに、職員の意識の向上につながると考える。 |
| 教育活動 | ○生徒指導の充実 | 共感的な生徒理解に基づいた生徒指導の実践 | ・交通ルール順守と基本的な生活の習慣を身に付けさせる。<br>・特別支援教育や教育相談と連携して生徒指導を進めると共に、開発的な生徒指導を充実させる。 | ・生徒指導協議会を充実させ、名札、挨拶、言葉遣い等、基本的な生活習慣が身に付くよう、全職員が同じスタンスで指導に当たる。<br>・交通教室を充実させる。<br>・児童生徒会活動を活性化させ、主体的に活動できるよう支援する。 | B | ・生徒指導協議会においては特別支援教育等とも連携をして共通理解を図って取り組み、一定の成果はあったが、指導が後手に回ることがあった。 | ・共通理解をしっかり図り、同じスタンスで指導に当たることが必要である。アンテナをしっかり張り、開発的な生徒指導を展開していかなければならない。 |
| 学校運営 | ○特別支援教育の充実 | 教員の意識の高揚と連携強化 | ・特別支援教育に関する研修会を実施し、対象児童生徒理解が深まったと感じる割合を90％以上にする。 | ・特別支援教育部を中心とした研修会を年3回実施する。<br>・支援員の先生方に、支援の理解を深める研修会を月1回行う。 | B | ・特別支援教育部や支援員の先生方を対象とした研修会を実施し、80％程度、対象児童生徒の理解を深めることができた。今後も、時間を十分にとって取組を継続する必要がある。 | ・特別支援の児童生徒の理解がより深まるように、特別支援コーディネーターが中心となり、年度当初から年間指導計画等を用いて特別支援教育部や支援員の先生方と共通理解する時間と場所を確保して、計画的にできるようにする。 |
| 教育活動 | ●健康・体つくり | 体力の向上 | ・立腰教育の推進を図り、正しい姿勢で学習に取り組む児童生徒の割合を90％以上にする。<br>・自力登校を促し、バス停や学校まで歩いたり、自転車を用いたりして登校する児童生徒の割合を90％以上にする。 | ・授業の前後は必ず立腰させ、授業中に正しい姿勢で受けられるようにする。<br>・自力登校の意義をしっかりと理解し、少しでも自分の足で登校することを意識させ、体力の向上を図る。 | A | ・アンケートでは、子どもが80％、保護者が90％の割合で自力登校、立腰をしているという結果だった。呼びかけを継続することで、だいぶ定着してきた。運動能力結果ではおおむね全国平均を上回っており、さらに向上させたい。 | ・継続的に自力登校、立腰活動を行わせ、基礎体力を向上させていく。<br>・体育の授業等でさらに体力向上できるように工夫して授業を行っていく。 |

### ③あいさつと歌声が響く学校づくりの推進

| 領域 | 評価項目 | 評価の観点<br>（具体的評価項目） | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題<br>（左記の理由） | 具体的な改善策・向上策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 教育活動 | ○母校の誇りづくり | 挨拶と歌声が響く学校 | ・挨拶運動を活性化させ、自ら挨拶のできる児童生徒の割合80％以上を目指す。<br>・行事等で「歌声を声高らかに堂々と歌う」児童生徒の割合80％以上を目指す。 | ・生活委員会を中心とした挨拶運動の実施をするなど、児童生徒会活動を促進させる。<br>・全校集会や児童生徒集会では、生徒が前で指揮をし、自分たちで校歌を歌う場面をつくったり、行事の前には、生徒会が放送などを利用して歌う意欲を高め、各クラスと連携しながら全校的に練習する場面をつくったりしていく。 | B | ・生活委員会で毎日の挨拶運動を輪番制で行ったり、「挨拶カード」を配布したりして挨拶の活性化を図る取り組みを行うことができた。<br>・「挨拶と歌声を響かせている」と答えた児童生徒は65％程度にとどまっているが、合唱コンクールでは保護者・教職員から高い評価を得た。 | ・挨拶運動は高学年になるにつれて効果が薄れている。挨拶運動をする児童生徒以外の挨拶がしっかりできるような手立てが必要である。<br>・歌声については、集会で生徒会を中心に歌う雰囲気を高める取り組みを続ける。また、義務教育学校の特性を生かし、9学年で歌う良さを実感させる。 |

### 本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

| 領域 | 評価項目 | 評価の観点<br>（具体的評価項目） | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題<br>（左記の理由） | 具体的な改善策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 教育活動 | ○教育の質の向上に向けたICT利活用教育の推進 | ICTを活用した授業の実践 | ・ICT機器の利活用の推進を図る。<br>・特別支援を要する児童生徒への視覚教材の推進を図る。 | ・校内にあるICT機器活用の充実を促進し、授業での効果的な活用を促す。<br>・ICT支援員と連携し、特別支援の児童生徒の特性に応じた使用方法を提案する。 | B | ・ICT機器の活用方法の伝達や、プログラミング教育について、ICT支援員と連携し、推進を図った。<br>・特別支援の児童生徒に対して視覚教材の使用方法の伝達が、不十分であった。 | ・プログラミング教育につてICT支援員の活用を図る。<br>・引き続き、ICT支援員や特別支援の教員と連携し、特別支援の児童生徒の特性に応じた視覚教材の推進を図る。 |
| 学校運営 | ○開かれた学校づくり | 保護者や地域の方々の学校行事や学校運営への参加促進 | ・学校ホームページや学校だよりを活用しながら、学校内の様子を広く地域に伝えていく。<br>・生活科、総合的な学習の時間などを中心に、地域の人材を活用した授業や地域に発信する授業を行う。 | ・こまめにホームページの更新を行ったり、地域の広報棚に学校だよりコーナーを設置したりして、最新の情報を伝える。<br>・地域の方を講師とした授業を実践し、地域との連携を深める。<br>・各教科、領域等で地域に発信・交流する場面を設ける。 | A | ・学校情報メールを毎月初め、及び行事ごとにこまめに発信して学校行事の情宣を行うことができた。学校だよりを広報棚に設置し、地域に発信することができた。<br>・海洋教育を中心に、各学年で地域の方を講師として招いた学習活動を行うことができた。 | ・ホームページに学校行事の様子や、各種たよりを掲載し、情報発信を充実させる。<br>・海洋教育等の学習成果の発表と学校公開日を重ねるなど、学校へ足を運びやすくするための工夫をする。 |
| 学校運営 | ●業務改善・教職員の働き方改革の推進 | 校務等の効率化の促進 | ・学校業務の見直しをし、教員が児童生徒と向き合う時間を確保できるように工夫する。<br>・全職員の残業時間を80時間以内にする。 | ・SEI-Net及び校内LANを活用し,学校文書の作成・提出の効率化を進める。<br>・タイムマネジメントを行うと共に、部活動についても町教育委員会が示したガイドラインに則した運営に努めるなどの実践を行いながら、定時退勤日を定着させる。 | B | ・児童生徒、保護者の8割程度が、先生が子どもと向き合うことができると捉えている。<br>・校内LANの活用が十分なされていない。教育の質を保ちつつ業務改善を進めていきたい。 | ・校内LANを活用して分掌事務を進める。年度初めに、SEI-Netに全員ログインできるようにする。<br>・定時退勤、残業時間削減、部活動の負担削減を進める。 |

## 4　本年度のまとめ　・　次年度の取組

学校教育目標「みらいへの挑戦～Go together～の認知度は高く、義務教育学校として1年生から9年までのつながりを意識した取り組みを職員全体が行ってきた成果が出ている。学校行事や総合的な学習の時間を活用した交流に加え、縦割り掃除の取組など年間を通した異学年交流を進めることができた。校内研究において海洋教育を全学年で取り組んだことで、情報を発信する力が伸びていると児童・生徒も保護者も感じている。児童生徒の情報共有をこまめに行い、共通理解・共通実践を図ったことで、学校全体として規律ある生活・学習に取組む雰囲気が育まれている。

課題として、基礎・基本となる学力の定着状況が不十分であることが挙げられる。次年度は学力向上につながる学習スタイルの研究を学校全体として取り組んでいきたい。業務改善については定時退勤の意識向上と残業時間の削減が進んではいるが、さらなる校務の効率化を進め、職員の働き方改革を進めていく必要がある。

●は共通評価項目、○は独自評価項目